

むら雨の露もまだひぬ旗の葉に霧立のぼる秋の夕ぐれ

〔日本書紀神代〕一書曰伊弉諾尊與伊弉冉尊共生大八洲國然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而熏滿之哉乃吹撥之氣化爲神號曰級長戸邊命

〔源氏物語三十九〕夕霧きりのたゞ此軒のもとまでたちわたれば、まかでんかたもみえずなりゆくは、いかゞすべきとて、

山里の哀をそふる夕ぎりにたちいでん空もなきこ、ちしてときこえ給へば、

山がつのまがきをこめてたつ霧も心空なる人はとゞめずほのかにきこゆる御けはひになぐさめつ、まことにかへるさわすればてぬ、

〔萬葉集九〕舍人皇子御歌一首

黒玉スバクマノヨ夜霧キリノタテ立衣手高屋於霏フエノタカヤウニ霏フエ麻マ天爾アメニ

〔古今和歌六帖一〕きり

まぐれにも雨にもあらぬ初霧のたつにも空はかきくもりけり

〔夫木和歌抄十三〕程へて有ける人によりみける

心みに我戀めやはをとせでふる秋ぎりにぬる、袖かな

〔古今和歌集四〕題まらす

春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴なる秋霧の上に

〔神皇正統記六〕後醍醐さても八月四年の十日あまり六日にや秋霧におかされさせたまひて、か

くれまし／＼ぬとぞきこえし、

〔改正月令博物筌三〕冬よゆのきり霧の霧はどにかく水ぎはに立也、

みつね今原関作者、依一本補

謙徳公

よみ人まらす